

松本市蚕糸記念公園の2つの記念碑

昭和45年開設

長野県松本市県1丁目1985番

松本支所と隣接したところに蚕糸記念公園があります。公園内には蚕業革新記念碑と秋蚕創業碑の二つの記念碑がある。



蚕業革新発祥記念碑	秋蚕創業碑
一代交雑の業績の偉大さや破竹の勢いにあった蚕糸業の力がおいにあずかり、昭和3年に松本城の城郭脇という一等地に建立されました。昭和45年に「蚕糸記念公園」の開設が実現したのを契機に記念碑としては蚕糸記念碑に移されて、ようやくふさわしい場所を得たといえるでしょう。蚕糸業発展の黎明期に松本地方がその中心であったことを永く後世に伝えてゆくであろう。	蚕種の風穴貯蔵利用法の確立と明治8年(1875)に長野県南安曇郡の蚕種家藤岡甚三郎が案出した窮理 <small>きゅうり</small> 法(低温催青)の二大技術によって、江戸時代から明治にかけて夏秋蚕の飼育が本格的にできるようになった。アルプス山麓の松本市稲核地方は夏秋蚕用の蚕種の製造・販売および蚕飼育が盛んになり、夏秋蚕の本場として繁栄した。

夏秋蚕飼育

江戸時代	江戸時代ではまだ春蚕が中心であり、夏蚕は一部にすぎなかった。江戸時代の蚕書のなかに、春蚕飼育に用いる蚕種は二化性の系統よりも一化性の系統のほうがよいと述べたものがある。これは一化性を用いたほうが、収繭量が多かったためであろう。また春蚕期に桑の葉を採り、続いて夏蚕期に桑を採るという技術は、まだ確立してはいなかったようである。わが国の夏蚕のおこりはかなり古いと考えられているが、江戸時代ではまだ春蚕が中心であり、夏蚕は一部にすぎなかった。夏蚕の飼育には、その春に、二化性品種を飼育して得られた不越年の蚕種を、主にあてていたとみられる。
1863年 文久3年	信州安曇郡稲扱の風穴を、春蚕種の貯蔵に利用しはじめた。 (前田風穴沿革史)
1864年 元治元年	夏秋蚕専用桑園が信州松本地方でつくり始められたという説がある。 蚕種の漸進催青法が説かれた (養蚕摘要)。
1866年 慶応2年	桑の春刈り夏秋専用仕立て法が考案され、秋蚕の普及を容易にした。
1865-1867年 慶応年間	信州において蚕種の風穴貯蔵によって蚕卵が春に孵化するのを抑制して飼育時期を遅らせ、蚕の発生を秋季にのばし得ることを発見し、秋蚕が始まる契機となった。風穴貯蔵によって一化性の蚕種を夏の飼育に使うこともできるようになった。
1897年代以降 江戸時代から明治にかけて	風穴の利用による夏秋蚕は 1897 年代から盛んとなり、養蚕普及に大きな役割を演じた。富士風穴、榛名風穴 (群馬県)、天城風穴、稲核いねこき 風穴 (長野県南安曇郡)、祖母風穴 (宮崎県高千穂町) など、いずれも著名な風穴の例
明治の中期	明治の中期には窮理催青 <small>きゆうりさいせい</small> 法の案出 (2 化性種を高温・長日条件で保護すると、その個体が成長し羽化した成虫の産む卵は休眠卵となり、翌春にならないと孵化してこない。これに反して、低温・短日条件で保護された卵から孵化し、成長・羽化した個体から産まれた卵は非休眠卵となり、およそ 10 日～2 週間後に孵化してくる。このように胚子期の保護条件によって化性を制御する) と蚕種の風穴貯蔵利用法の確立並びに桑の仕立、収穫方法の工夫によって夏秋蚕の本格的な飼育が可能になった。

<p>1907年 明治40年</p>	<p>蚕種貯蔵の風穴数は全国に122カ所あり、このうち長野県には約半数の55カ所あり、2位は山梨19カ所だった。アルプス山麓の松本市稲核地方では夏秋蚕用の蚕種の製造・販売および蚕飼育が盛んになり、夏秋蚕の本場として繁栄した。</p>
<p>夏秋蚕、特に秋蚕の増大</p>	<p>風穴の利用による夏秋蚕は秋蚕は稲作の労働と重複しない適当な時期に掃立て得るところから、それまで稲作との関係から養蚕を行い得なかった農家も秋蚕飼育を行うようになっていった。これが養蚕普及に大きな役割を演じたのである。夏秋蚕の普及状況を第29表に示す。これによれば、1887年には夏・秋蚕の全産繭額のおおの21%及び4%に過ぎなかったが、1902年には夏蚕14%、秋蚕16%となって秋蚕は夏蚕よりも増大し、第1次大戦後の1919年（大正8年）には夏蚕10%、秋蚕40%となって夏秋蚕と春蚕が相半ばするに至っている。</p> <p>このような夏秋蚕、特に秋蚕の増大は単に稲作の関係から養蚕を行い得なかった農家の養蚕開始によるものではなく、従来は春蚕に力を注いだものまでが夏秋蚕にも同様に努力するようになったもので、1907年（明治40年）以降の農業危機開始とともに農家経済はますます窮迫し、桑園の能力以上の夏秋蚕飼育を行い、ために桑園の荒廃を来たすものすらあった。</p>